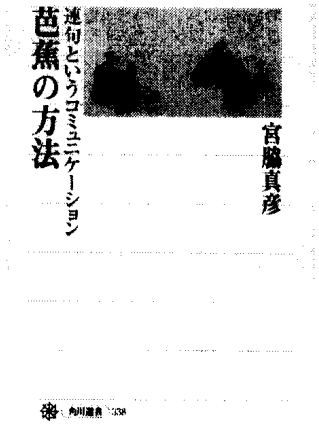
宮脇真彦著

『芭蕉の方法 ―連句というコミュニケーション』

平成十四年四月発行　角川選書
全書判　二三八頁　一五〇〇円



日本語の詩歌表現は五拍の句と七拍の句に安定し、その繰り返しによって生まれる短詩が日本の定型詩の基底をなしている。とはいえ、これまで誰も詩歌の表現機能としての五句・七句が生む定型表現の規律性と詩化の仕組みを明晰に解き明かしたものがいない。近代言語学の音声・音韻学からも、また詩学の側からも、今日に至っても納得のいく説明を施すことができないでいる。詩歌の基底における構造の解明はいわば日本語定型詩の謎への挑戦に近い。ただ現実には史的に五句・七句の組み合わせが五・七・五・七・七の短歌形式として安定した。一方、五・七・五の前部要素の表現を七・七の後部要素が支えるという短詩型はこれら前後の要素を分離することを可能とし、中世以降「連歌」という複数の人々が一つの表現世界を共有できることばの知的遊戯空間を形成した。それは日本語による頭脳ゲームとしての面白さを醸し、高度な詩歌の表現世界にいたる。

宮脇真彦の試みは、こうして中・近世に展開された「連句」の方法における日本型詩歌の今日性をいい、五・七・五と七・七の織りなす表現の機能を構造的に解き明かそうとすることにあるものとみられる。本書の内容は「一、言葉との出会い―読むということ　二、連句というコミュニケーション　三、付けの方法・転じの方法　四、芭蕉連句の世界―コミュニケーションの実際　五、芭蕉付句抄　付録　引用句索引」の五章から成っている。

基本は「連句」における「ことばとコミュニケーション」の解明にある。これは表現する行為と人間関係の探求と言い換えてもいい。底を支えるものは「他者という人間との

響き合いの核」への視線である。それを「連句」という「座」の文学世界にみようとする。しかし、全体を覆うものが何かといえば、それは「連句」の表現機構が複数の人間の相互にあって、いかなる均衡と危うさとを持ち合わせて成立し、さらに芸術性を獲得するものであるのかの探求であるともいえる。

「連句」は宗匠を囲んで、座を組み、発句の五・七・五に七・七を付け、一つの表現の世界を作り、この七・七に第三の者が五・七・五を詠み、また新しい表現世界を形成する。座は巡り、規則にしたがって運ばれ、やがて編み上げられたひとつのコスモスを成す。その行為は座にある人間間にあって、ことばの意味を最大限に追求する精神の営みに似ている。宮脇は中・近世に展開されたそのような句の付け合いによる表現世界の本質を人の関係の連鎖的な伝達行為と捉え、これが日本語におけるコミュニケーションの方法のひとつであることをいう。「連句」においてつぎつぎと形作られる五・七・五と七・七の拍の結合群は積層的に最終の表現場に至る世界を具体となす。

第一章「一、言葉との出会い—読むということ」はその意味で、すぐれて啓蒙的であり、本書にいう基本の事柄を網羅している。いわばそれは著者のことば観であり、また日本詩歌論の基本部分を述べるのに近い。宮脇はかつてフランスのシュールレアリストの試みた共同詩「妙なる屍」を模して、現代の高校生と組んだ実践の結果とその解析から「言葉は、発話者の意図に従属する存在なのではなく、むしろ言葉同士の結びつきにおいて読まれるべき意味を喚起する」という。

「連句」の方法は、詩人たちが時に願う、自分以外の人間に生起するイメージの共有と乖離との間に生まれる表現世界の中・近世的な実践であった。それゆえここから生まれる「連句という文学の意義は、まさにこの創作でもあり享受でもあるという地平に読者である我々が連なることにある」とする。

こうしてこの章の後半部から第二章「二、連句というコミュニケーション」の過程で連歌俳諧史の具体から表現の構造的特徴を取り出し、あるいは自らの実践記録に基づき「連句」の具体的な方法とコミュニケーションの方法とをいう。ここには「連句」という詩歌の形式における現在性の提示があり、さらに第三章以下は連歌・俳諧の研究者としての専門的な解析への道程である。具体的には「芭蕉に

おける連句」として、俳諧の樹立者芭蕉がどのように芭蕉の門下に集った者と座を通じての対話をしたかに及んでいる。第三章以下では著者の専攻する論考を本書のような啓蒙的著述において一般の読者に向けて対象化した密度の高い内容が展開される。「三、付けの方法・転じの方法」には中・近世史にみられる連歌の具体的な事例をもって「連句」の展開された内容を解いている。また「四、芭蕉連句の世界―コミュニケーションの実際」は蕉門における連句の緻密な解釈が施され、芭蕉論、蕉門論の一角を表して興味深い。さらに「五、芭蕉付句抄　付録　引用句索引」は宮脇の基礎研究の現実を表わしている。

本書は全体を通じて「連句」を透かして著者のことばとコミュニケーションへの姿勢を語るものであり、同時に宮脇の詩学を示すものとなった。そのような点からみると、本書は宮脇の専攻領域におけるアカデミックな達成を前提にした高度な内容の噛み砕きでもあり、芭蕉における表現論の核の一部を「芭蕉の連句法」というような書物に仕立て上げたものというべきであるかもしれない。

ただ、本書を読んでいていくつか疑問があった。たとえばここにいう「韻文」というタームが日本文学研究の場では比較的よく使われるが、これにはやはり一言添えておきたい。日本語の詩歌表現においては、ことばの性質からみて「韻」を踏むことができない。つねに「拍」の統合によって一定の音律性をもち、調和をなしている五句と七句の組み合わせがことば音の心地よさと響きとを伝え、この音結合における調和が日本語詩歌の特徴となっている。日本語の詩的表現には本来「韻文」を成り立たせることばの機能はない。宮脇が底にことばのメカニズムを意識している分、タ―ミノロジーが気になるのである。

本書で教わったことは多く、わたしには刺激的な書物でありうれしく思った。願わくは、今後、詩歌研究における日本語の音律論への新たな視点を運び込んで欲しいものと強く感じた。

（岡田　袈裟男）